英語文学を教材として読むための発問

― Hemingway 作“A Day's Wait”を用いて ―

小　野　　章
広島大学大学院教育学研究科
武　久　加　奈
広島大学大学院教育学研究科院生
石　原　知　英
愛知大学経営学部

1．はじめに

平成21年に公示された高等学校学習指導要領において，外国語科の目標は次の三つの柱から成り立っている。

①外国語を通じて，言語や文化に対する理解を深めること。
②外国語を通じて，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること。
③外国語を通じて，情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を養うこと。

本論は英語で書かれた文学を高等学校の英語教材として用いることを考察するものであるが，文学は上記三本柱のいずれにも関わることが出来ると考えている。しかし本論では，特に「外国語を通じて，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること」という柱に着目しながら，文学の英語教材としての在り方を論じたい。

文学を英語教材として用いる場合，活動としては読みが中心になると考えられる。文学の読みに限らず読みという活動全般において，「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を育むには，読みが楽しいと高校生に思わせることが最良の方法のひとつであろう。文学を読む大きな目的に，読むこと自体を楽しむというものがある。それは，平成11年公示の『高等学校学習指導要領解説外国語編』にも次のように表現されている。

> リーディングには，情報や書き手の意向を読み取るという実用的な目的のほかに，読むことそのものを楽しむという目的もある。特に，詩，物語，劇などの文学作品はそのような目的のために読まれるのが一般的である。

これは現行の指導要領の解説中の表現であり，平成21年に新たに公示された指導要領の解説中には見られない。しかし，文学作品が「読むことそのものを楽しむという目的」のために読まれるという指摘は普遍的なものであろう。文学こそ，読みの楽しさを高校生に実感させること，さらには「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を育成することに寄与し得ると本論は考える。

読みの楽しさはどこに起因するのであろうか。ロラン・バルトによると，読みの楽しさは，読みという行為に読者が主体的に関わった時に生起する（Barthes, 1977）。現在の日本の英語教科

書において文学を扱ったレッスン等はほとんど見られない（江利川，1998；2004）。また，たとえ扱っていても，読みの楽しさを実感させるような工夫はほとんど施されていない。英語で書かれた文学に不慣れな学習者にとって，楽しく読むための助けとなるのが発問であろう。発問を通じて学習者は，正確に英語を理解し，行間を読み，さらには解釈へと行き着く（ここでの解釈は必ずしも高度な文学解釈を意味するのではなく，個人的な反応や感想等をも含む）。換言すれば，正確な字義理解だけではなく，推論を働かせて行間を読んだり，個人的な解釈を試みたりすることによって学習者は読みという行為に主体的に関わり，読みの楽しさを実感する。しかし，残念ながら，字義理解をねらった発問は見られるものの，推論や解釈に関わる発問は教科書中にはほとんど見られない。そしてこれは，文学を扱ったレッスンのみならず，英語教科書中のレッスン全般に当てはまることでもある（深澤，2008；武久・小野，2010）。つまり，教科書にある発問のほとんどが正確な字義理解のみをねらったものとなっている。説明文に対する発問の場合はそれでもよかろうが，読みの楽しみを大きな目的とした文学の場合，正確な字義理解のみを意図した発問は，学習者による主体的な読みの可能性を閉じ，結果，楽しいはずの読みを退屈なものにしてしまわないとも限らない。

本論では，文学の読みを助ける発問の在り方を探った上で（第２節），高等学校用英語教科書に掲載された Hemingway の短編“A Day's Wait”を取り上げながら実際の発問を考えたい（第３・４節）。

２．文学の読みを助ける発問

文学教材の読みに限らず，リーディングにおける発問の重要性はこれまでにも指摘されてきた（Nuttall, 1982；高梨・高橋，1987；高梨・卯城，2000；深澤，2008他）。発問の種類についても，２種類で良いとするもの（築道, 1989）から，７種類設けるべきだとするものまで存在する（高梨・高橋，1987）。本論では，拙論（小野，2011）における分類に従って，文学の読みを助ける発問としてタイプＡ～Ｃの３種類を設定したい。

表１．文学教材の発問分類（小野（2011）から引用）

発問の種類	発問のねらいと留意点	答の有無とその種類
タイプＡ： 理解に関わる発問	次のタイプＢ，Ｃの発問へと進むために，まずは教材本文の内容を正確に理解させる。このタイプＡの発問を通して，内容全体が把握出来るようになるのが望ましい。	有（明示的）
タイプＢ： 推論に関わる発問	文学の特徴とも言える「行間の意味」を考えさせることで，読みの面白さ・深さに触れさせる。「行間の意味」故に暗示的なものではあるが，答えは決まったものが存在する。	有（暗示的）
タイプＣ： 解釈に関わる発問	読みにおいては読者も大きな役割を果たすことに気付かせる。必ずしも「専門的な文学解釈」である必要はなく，感想程度でも可とする。	無（個人によって異なる）

基本的にはタイプＡからタイプＣの順番で文学教材を読み進めて行くことになろうが，その順番が入れ換わることも考えられる。また，ひとつの発問が複数のタイプにまたがることもあり得る。さらには，教材本文の同じ箇所をめぐって異なるタイプの発問を作成することが可能な場合もあ

ろう。肝要なのは，タイプＡからタイプＣまでの３種類の発問がバランス良く散りばめられていることである。学習者は，タイプＡでまず字義理解を図った上で，タイプＢで行間を読み，最終的にはタイプＣで独自の読みを展開することが期待される。

３．教科書における文学教材分析

「はじめに」で触れた通り，文学作品は英語教科書から消えつつある。特に，原文に近いかたちでの掲載例はほとんど見当たらない。文学作品が教科書に掲載された場合，場面の省略や表現の書き換えなどの改作が行われることが多く，そのために作品の解釈が妨げられてしまうこともある（濵口，2008）。発問を通して解釈に至ることを提案する本論としては，出来るだけ原文に近いものが本文として掲載されている例を，高等学校用英語教科書中に探してみた。結果，*PRO-VISION ENGLISH READING* New Edition（桐原書店）に“Supplementary Reading”として採用されている Hemingway の短編“A Day's Wait”（本論“Appendix”に全文を掲載）が，研究対象にもっとも相応しいと判断するに至った。“A Day's Wait”は総語数1056語という短い作品で，その全文が同教科書には１点を除いて原文通り掲載されている。その唯一の違いとは，原文の“a little walk up to the road”という表現が，教科書では“a walk up to the road”となっている点である。“little”という単語が高校生にとって難しいものではないことを考えると，この違いは恐らく単なるミスの結果であると考えられる。

教科書の目次には「アメリカの代表的小説家 Hemingway の短編です．文学作品の鑑賞によって，テーマや文章などの文学的な読み方に親しむようにします．」と書かれているように，教材“A Day's Wait”を読む主な目的は文学作品の鑑賞にある。しかし，同教材には，短い紹介文と，難しいと思われるいくつかの表現に補足説明が付されているだけで（紹介文と補足説明は“Appendix”を参照），発問は全く存在しない。読みの助けとなるべき発問が無い状態では，教師も学習者もいかにして「文学的な読み方」を実践すべきか戸惑うことであろう。恐らく，ただ物語の流れを追うだけになってしまうことが予想される。

前節で触れた通り，文学の読みを実践するには，(1)「タイプＡ：理解に関わる発問」によって内容の大意を把握し，(2)「タイプＢ：推論に関わる発問」によって明示的には書かれていない事柄を読み取り，(3)「タイプＣ：解釈に関わる発問」によって独自の読みを展開する必要がある，と本論は考える。次節では，これら３タイプの発問を考慮に入れながら，Hemingway 作“A Day's Wait”に対する発問を実際に作成してみたい。

４．Hemingway 作“A Day's Wait”を用いた発問例

作成した発問は２つのパートから構成されている。Part Ⅰは，主に「タイプＡ：理解に関わる発問」から成り，物語の大意確認を目的としている。Part Ⅱは，タイプＡに加え，「タイプＢ：推論に関わる発問」や「タイプＣ：解釈に関わる発問」も含み，作品をより深く読むことを目的としている。教室での使用を考え，発問に答える高校生の目安となるように，Part Ⅰには「内容を正しく理解しよう」，Part Ⅱには「少し難しい問題に挑戦しよう」という文言を付けた。なお，発問作成の参考に，Hagopian and Dolch（1962），Mahony（1968），Gajdusek（1989）などの解釈にあたってみたが，日本の高校生に適切と思えるものは特に見当たらなかった。よって次頁以降の発問も本論独自の作品解釈に基づいている。各発問には，解答例と発問の意図（「備考」欄）を付けるとともに，発問のタイプも示した。

表2-1. Hemingway 作“A Day’s Wait”を教材として読むための発問（内容理解編）

Part I. 内容を正しく理解しよう

発問・解答例・備考	タイプ
Q１．この物語を語っているのは誰ですか。 A．父親 備考：物語が父親の視点から語られていることを確認させる発問。続けて「『桃太郎』の語り手は誰ですか？（解答例：登場人物以外の第三者）」といったような発問を重ねることで，物語には「語り手」が存在するということをより明確に理解させることができる。	A
Q２．“He”（p.163, l.1）とは誰のことですか。 A．Schatz 備考：この物語は代名詞“he”から始まっている。「代名詞が指すものは代名詞よりも前にある」と思っている学習者は困惑する可能性があるため，確認する必要がある。	A
Q３．Schatz は何歳ですか。 A．９歳 備考：Schatz の子供らしい勘違いがこの作品の理解に大きく関わってくる。よって，Schatz の年齢を確認しておくことは重要である。	A
Q４．Schatz の体調不良の原因は何でしたか。また，医者の診断はどのようなものでしたか。 A．インフルエンザ。熱が104度以上にならなければ心配ないし，肺炎を避ければ危険はない。 備考：物語の序盤で父親（と学習者）は，Schatz の病気がごく一般的なインフルエンザであり，故に命の危険もないことを知る。これを発問で確認しておくことによって，Schatz の勘違い（「（ただのインフルエンザにも関わらず）自分はもうすぐ死ぬと思っていた」という勘違い）がより際立つ。	A
Q５．医者が帰り，父親が部屋に戻ってきた時の Schatz はどんな様子でしたか。またその理由は何だと思いますか。 A．様子：顔は白く，目の下にくまがあった。ベッドに横になって，ぼんやりしていた。 理由：インフルエンザの症状が出ていたから。 備考：Schatz がぼんやりしていたのは，表面的には単にインフルエンザの症状が出ていたからであろう。しかし，後にわかるように，この時の Schatz の様子には別の理由（自分がもうすぐ死ぬのでないかという不安感）もあったと思われる。	A
Q６．“It doesn’t bother me.”（p.164, l.17）とありますが，この“it”は何を意味していると考えられますか。 A．Schatz を看病すること。 備考：明示されてはいないものの，父親はこの“it”を「Schatz を看病すること」の意味で用いたのであろう。しかし，後の Q13で触れるように，“it”には別の意味もあると解釈出来る。それが何であるかを考えさせるための橋渡しとしての働きも Q６は持っている。	A・B

Ｑ７．父親の取った行動を一日の時間の流れに沿って書いてみましょう。 Ａ．　**朝** ・Schatz の体調不良に気づく 9：00　・医者を呼ぶ ・Schatz がインフルエンザだとわかる ・Schatz に本を読み聞かせる ・Schatz の様子がいつもと違うことに気がつく 11：00　・Schatz に薬を飲ませた後，狩りに出かける ・２匹のウズラを仕留め，５匹を逃す ・家に戻ってくる ・Schatz の体温を測る ・Schatz に薬を飲ませる ・Schatz に本を読み聞かせる ・Schatz の様子がおかしかった原因が明らかになる **夕～夜** 備考：これまでの発問（Ｑ１～Ｑ６）は全て「タイプＡ：理解に関わる発問」であったが，どちらかというと細かい点を確認するための発問であった。それに対し，このＱ７は，同じタイプＡでありながら，物語全体の流れを時間軸によって理解させることを意図したものである。	Ａ
Ｑ８．Schatz は自分がどうなると勘違いしていましたか。また，その勘違いの原因は何ですか。 Ａ．自分がもうすぐ死ぬと勘違いしていた。その原因は，摂氏と華氏の違いを知らなかったことにある。 備考：些細な勘違いと，それが招いた非常に大きな苦しみのコントラストが，この物語における最大のポイントであることを理解させたい。	Ａ

表2-2. Hemingway 作“A Day's Wait”を教材として読むための発問（推論・解釈編）

Part II. 少し難しい問題に挑戦しよう

発問・解答例・備考	タイプ
Ｑ９．Schatz の「勘違い」を念頭に置きつつ，医者が帰った直後の Schatz と父親のやり取り（p.163, l.29～p.164, l.6）をもう一度読み，父子のそれぞれが何を考えているか想像しなさい。 Ａ．父親：Schatz は，本の読み聞かせにもついてきてないようだし，インフルエンザの影響でとにかくぼんやりしているなぁ。 Schatz：「今のところはさっきまでと同じ」（‘Just the same, so far’）だけど，もうすぐ急な変化が来るのかなぁ。死ぬのは怖いなぁ。 備考：明示されていない父子の考えを，両者のやり取りから推論させる発問。また，語り手である父親の視点からではなく，Schatz の視点から読みなおすことで解釈が異なってくることも理解させたい。	Ｂ

Q10. “at the foot of the bed”もしくは“at the foot of his bed”という表現が何度か出てきます。それらを探した上で，その前にある動詞が何か答えなさい。 A．sat (p.164, l.7) / look (p.164, l.10) / stare (p.165, l.17) / gaze (p.166. l.26) 備考：次のQ11とQ12につながる発問である。	A
Q11. look, stare, gaze の意味の違いを英英辞書で調べてみましょう。 A．look: to turn your eyes in a particular direction stare: to look at sb/sth for a long time gaze: to look steadily at sb/sth for a long time, either because you are very interested or surprised, or because you are thinking of sth else （*Oxford Advanced Learner's Dictionary* の定義による） 備考：いずれの動詞も「見る」ことを意味するが，それぞれ異なったニュアンスを持っていることを理解させ，作家がいかに表現にこだわって書いているかに気付かせたい。	A
Q12. look, stare, gaze という語の変化は，Schatz のどのような様子を表していると考えられますか。 A．時間の経過とともに，死ぬことに対する恐怖で緊張が高まっていく様子。 備考：単なる「見る」という動詞から，「考え事をしているために一点を凝視する」という動詞へと変化しているのは，時間の経過とともに Schatz の中で「死」に対する恐怖感が大きくなっていったことを暗示しているのであろう。	B・C
Q13. “…if it bothers you.”（p.164, l.16）の“it”は少なくともふたつのことを指示していると考えられます。それは何と何ですか。父親と Schatz の視点に着目しながら答えなさい。 A．父親が Schatz を看病することと，Schatz が間もなく死ぬこと。 備考：指示対象がはっきりとは書かれていない“it”の意味を推論，解釈させるための発問。父親の視点に立つと，Q６で触れたように“it”は「Schatz を看病すること」の意味になる。しかし，Schatz の視点に立ちながら，彼がこの時「勘違い」していたことを考慮すると，“it”は「Schatz が間もなく死ぬこと」を意味するとも取れる。指示対象がはっきりしない“it”を Schatz がここで使っているのは，自分の死に言及することがためらわれたからであろう。この場面における父子の会話は，一見成立しているように見えて，実はすれ違っているとも解釈出来よう。	B・C
Q14. “Oh,”（p.166, l.25）という台詞を，この時の Schatz の気持ちが伝わるように音読してみましょう。 A．省略 備考：たった一語の台詞であるが，適切に音読するためには，文脈をよく理解しておく必要がある。つまり，一日中死の恐怖と闘ってきた Schatz が，自分の勘違いを知って思わず漏らした安堵の台詞なのである。「安堵」をどのように音読で表現するかは学習者によって異なろう。よって，タイプＡとＣの両方に関わる発問とした。	A・C
Q15. Schatz は自分が死ぬと勘違いしていましたが，この勘違いを父子間の「コミュニケーション」という観点から見るとどのようなことが言えますか。	B・C

A．父子間のコミュニケーションがしっかり取れているとは言い難い。 備考：幼い Schatz の勘違いを軸にした一見ユーモラスな話から，実は深刻な問題が浮かび上がってくる。もし父親が不審な挙動を見逃さすことなく Schatz の真意を確認していれば，また，Schatz も素直に自分の不安を父親に話していれば，勘違いはそもそも起こらなかったはずである。Schatz と父親との間には，通常の父子間にあるようなコミュニケーションが欠落しているとも考えられよう。	
Q16. “…he cried very easily at little things that were of no importance.” (p.166, ll.28–29) とありますが，どうして Schatz は些細なことで泣くようになったのだと思いますか。 A．Schatz は，一日中「自分は死ぬかも知れない」という極度の恐怖を感じながら，それを外に出さないように努めていたため，その反動で感情が表に出やすくなってしまったから。 備考：物語最後の文である“…he cried very easily at little things that were of no importance.”は，物語のそれまでの内容とあまり関連がないように思える。しかし，「一日中死の恐怖と相対していた」ことが Schatz に大きな影響を残したであろうことは想像がつく。どうして些細なことで泣くようになったのか，Schatz の気持ちになって考えさせたい。	C
Q17. Schatz の看病の合間に父親はウズラ狩りに出かけますが，次の引用は，狩りを終え，帰宅の途についた父親に触れたものです。 “[I] started back pleased to have found a covey close to the house and happy there were so many [quails] left to find on another day.” (p.165, ll.9–10) この中の“another day”という表現に着目しながら，父親と Schatz のそれぞれにとってこの一日がどのようなものであったかを考えなさい。 A．父親にとって：これからも“another day”がずっと続く人生の単なる一日。 Schatz にとって：“another day”が来ることのない，人生最後の一日となるかもしれない。 備考：Q13では，視点によって“it”の意味が異なってくることに言及した。ここでも同様に，同じ“day”が視点によって異なる意味を帯びてくることを理解させたい。また，“A Day’s Wait”というタイトルについて考えさせる Q18への橋渡しとしての役割もこの Q17は担っている。	B・C
Q18. この作品はなぜ“A Day’s Wait”というタイトルを持っていると思いますか。タイトルを日本語に訳した上で，解釈して下さい。 A．日本語訳：一日の待機，一日待つこと。 解釈：Schatz にとっては「死を待つ一日」であるが，父親にとっては「Schatz が快方へと向かうのを待つ一日」であり，同じ一日が持つ重みの違いを強調したかったから。そう考えると，“A Day’s Wait”というタイトルは，“A Day’s Weight”という意味を隠し持っているとも解釈される。 備考：Q17と関連した発問である。作家は言葉を厳選してものを書くものである。同じ内容を表すにしても，様々な表現をあてはめようとする。ましてやタイトルとなると，表現に対するこだわりはなおさらのことであろう。内容のみを問題にすれば，“A Day’s Misunderstanding”や“A Day’s Worry”というタイトルでも良いと思えるが，敢えて“wait”という表現を含んだタイトルになっている理由を考えさせたい。	C

“A Day’s Wait”は，表面上はSchatzの勘違いをめぐるユーモラスな話である。しかし，そこには，息子を思いやりながらも彼の真意を全く理解出来ていなかった父親の衝撃や，死の恐怖と戦いながらもそれを素直に口にすることが出来ないSchatzの苦しみなど，父子間におけるコミュニケーションの齟齬といったテーマも読み取れる。このテーマを解釈のポイントとしつつ，本論では発問を作成した。

5．おわりに

本論では，文学の読みを助ける発問のタイプとして，「タイプA：理解に関わる発問」「タイプB：推論に関わる発問」「タイプC：解釈に関わる発問」を提案した上で，これら３タイプの発問の具体例を，高等学校用英語教科書に実際に掲載されたHemingway作“A Day’s Wait”を本文として示した。

本論で例示した計18個の発問中，表2-1と表2-2の右の欄にあるように，ひとつのタイプに絞り込めると判断した発問は12個（例：Q18），２タイプにまたがると判断した発問（例：Q17）は６個であった。Q17のようにタイプ「B・C」とした発問を，タイプBがひとつ，タイプCもひとつと数えると，タイプ別に分けた発問の割合は，A：B：C＝11：６：７となる。

武久・小野（2010）によると，教科書中の発問は圧倒的にタイプAのものが多い。

表３．教科書中の発問のタイプ（武久・小野（2010）から引用）

教科書	理解	推論	解釈	計
Element	98.0%（95）	1.0%（1）	1.0%（1）	100.0%（97）
Big Dipper	93.3%（182）	0.0%（0）	6.7%（13）	100.0%（195）
Vivid	92.6%（262）	3.9%（11）	3.5%（10）	100.0%（283）
Polestar	88.2%（187）	6.1%（13）	5.7%（12）	100.0%（212）
Crown	73.6%（117）	3.8%（6）	22.6%（36）	100.0%（159）

表３は，文学教材に対する発問に限らず，現行の高等学校用リーディング教科書（28種中，採択率上位５種）における発問全般の傾向を探ったものである。教科書には推論や解釈に関わる発問が非常に少ないということがわかる。もちろん，推論や解釈をするためには，まずは字義通りの意味を理解する必要がある。しかし，それは「理解に関わる発問」のみに終止してもよいということではない。築道（1989）も，字義理解を確認する発問のみでは「本文から答えを『さがす』だけの作業となってしまい，学習者の読解力を伸ばすことにはつながらない」と述べている。学習者に答えを「探させる」のではなく「考えさせる」リーディングにするためには，推論や解釈に関わる発問が重要となる。このことは，「字義理解」=「テクストの理解」とはならない文学教材には特にあてはまろう。

最後に，重要と思われる課題を２点挙げておきたい。

(1) 発問にはタイプA～Cをバランスよく組み合わせることが重要であることを指摘した。それが読者の読みを活性化し，ひいては「コミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること」に貢献すると考えたからである。しかし本論は，理論的枠組と発問例は提示したものの，推論や解釈に関わる発問が実際どれだけ学習者の読みを刺激するかについては明らかにして

いない。アンケート調査等を用いた研究が必要である。

(2)「はじめに」で触れたように，学習指導要領に掲げられた目標の三本柱のいずれにも文学は関わることが出来ると考えている。しかし，本論では「コミュニケーションを図ろうとする態度」の育成と文学の関わりのみを扱った。本論では扱わなかった二本の柱と文学の関わりについても，理論的，実証的な研究を今後行っていく必要がある。

＊本論は，科研費助成事業の学術研究助成基金助成金（基盤研究費（C））研究課題番号23520305「英語教育材料としての英文学の可能性を探る研究」の補助を受けて執筆された。

参考文献

Barthes, R. (1977). *Image-Music-Text*. London: Fontana Press.

Gajdusek, L. (1989). Up and Down: Making Connections in “A Day’s Wait”. In Susan. F. Beegel (Ed.), *Hemingway’s Neglected Short Fiction: New Perspectives* (pp.291-302). Michigan: UMI Research Press.

Hagopian, J. V., and Dolch, M. (1962). *Insight I: Analyses of American Literature* (pp.103-105). Frankfurt am Main: Hirschgraben-Verlag.

Hemingway, E. (1998). A Day’s Wait. *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway* (pp.332-334). New York: Simon & Schuster.

Mahony, J. (1968). Hemingway’s “A Day’s Wait”. *Explicator*, 27 (18).

Nuttall, C. (1982). *Teaching Reading Skills in a Foreign Language*. London: Macmillan.

小野　章(2011).「高等学校用英語教科書における文学－教材本文と発問のあり方を中心に－」『英語英文學研究』55，45-58.

江利川春雄（1998）.「教科書にみる文学作品の変遷史」『英語教育』47(2)，8-10.

———(2004).「英語教科書から消えた文学」『英語教育』53(8)，15-18.

塩澤利雄・矢野安剛・千葉元信・森田勝之・相澤一美・時岡裕純・黒崎春美・Gregory Hutchinson (2007).「Supplementary Reading: A Day’s Wait」『PRO-VISION ENGLISH READING New Edition』162-166.（桐原書店）

高梨庸雄・高橋正夫（1987）.『英語リーディング指導の基礎』研究社.

高梨庸雄・卯城祐司（2000）.『英語リーディング辞典』研究社.

武久加奈・小野　章（2010）.「字義理解を超えたリーディングの在り方について－高等学校外国語科用リーディング教科書の発問の現状分析－」『教育学研究紀要』（CD-ROM 版）56，532-37.

築道和明（1989）.「英語読解指導における発問」『島根大学教育学部紀要（教育学）』23(2)，47-53.

濵口脩（2008）.「EFL クラスにおける文学教材の読解指導－学習者の理解を促す支援－」『学校教育実践学研究』14，239-246.

深澤清治（2008）.「読解を促進する発問作りの重要性－高等学校英語リーディング教科書中の設問分析を通して－」『広島大学大学院教育学研究科紀要』57(2)，169-176.

文部省（1999）.『高等学校学習指導要領解説　外国語編』

文部科学省（2009）.『高等学校学習指導要領解説　外国語編』

APPENDIX：教科書版“A Day's Wait”（四角括弧内の頁は教科書中のもの）

p. 162

A DAY'S WAIT　Ernest Hemingway

アメリカのノーベル賞作家 Ernest Hemingway（1899–1961）の実話をもとにしたと言われる短編小説です。インフルエンザにかかった９歳の少年が，ベッドの中で静かに待っていたものとは何だったのでしょうか。父と子のさわやかな対話と簡潔な文体から，深い意味を読みとるようにしましょう。

p. 163

He came into the room to shut the windows while we were still in bed and I saw he looked ill. He was shivering, his face was white, and he walked slowly as though it ached to move.

Schatz:
「（ドイツ語）宝物，大切な人」英語の darling にあたる

'What's the matter, Schatz?'

'I've got a headache.'

'You better go back to bed.'

'No, I'm all right.'

'You go to bed. I'll see you when I'm dressed.'

You go to bed.:
主語がある命令文

But when I came downstairs he was dressed, sitting by the fire, looking a very sick and miserable boy of nine years. When I put my hand on his forehead I knew he had a fever.

'You go up to bed,' I said, 'you're sick.'

'I'm all right,' he said.

When the doctor came he took the boy's temperature.

'What is it?' I asked him.

'One hundred and two.'

Downstairs, the doctor left three different medicines in different colored capsules with instructions for giving them. One was to bring down the fever, another a purgative, the third to overcome an acid condition. The germs of influenza can only exist in an acid condition, he explained. He seemed to know all about influenza and said there was nothing to worry about if the fever did not go above one hundred and four degrees. This was a light epidemic of flu and there was no danger if you avoided pneumonia.

acid condition:
体が酸性になると病気になると言われていた

Back in the room I wrote the boy's temperature down and made a note of the time to give the various capsules.

'Do you want me to read to you?'

'All right. If you want to,' said the boy. His face was very white and there were dark areas under his eyes. He

want to (read to me)

p. 164

lay still in bed and seemed very detached from what was going on.

I read aloud from Howard Pyle's *Book of Pirates*; but I could see he was not following what I was reading.

'How do you feel, Schatz?' I asked him.

'Just the same, so far,' he said.

I sat at the foot of the bed and read to myself while I waited for it to be time to give another capsule. It would have been natural for him to go to sleep, but when I looked up he was looking at the foot of the bed, looking very strangely.

'Why don't you try to go to sleep? I'll wake you up for the medicine.'

'I'd rather stay awake.'

After a while he said to me, 'You don't have to stay here with me, Papa, if it bothers you.'

'It doesn't bother me.'

'No, I mean you don't have to stay if it's going to bother you.'

I thought perhaps he was a little light-headed and after giving him the prescribed capsule at eleven o'clock I went out for a while.

It was a bright, cold day, the ground covered with a sleet that had frozen so that it seemed as if all the bare trees, the bushes, the cut brush and all the grass and the bare ground had been vanished with ice. I took the young Irish setter for a walk up the road and along a frozen creek, but it was difficult to stand or walk on the glassy surface and the red dog slipped and slithered and fell twice, hard, once dropping my gun and having it slide over the ice.

We flushed a covey of quail under a high clay bank with

p. 165

overhanging brush and killed two as they went out of sight over the top of the bank. Some of the covey lit the trees, but most of them scattered into brush piles and it was necessary to jump on the ice-coated mounds of brush several times before they would flush. Coming out while you were poised unsteadily on the icy, springy brush they made difficult shooting and killed two, missed five, and

Howard Pyle:
アメリカの童話作家（1853–1911）

so far:
until now

For him to go…:
If he had gone…

The ground (being) **covered…:**

Irish setter:
アイリッシュ・セッター種の猟犬．赤みを帯びた金色の被毛を持つ．

started back pleased to have found a covey close to the house and happy there were so many left to find on another day.

At the house they said the boy had refused to let anyone come into the room.

'You can't come in,' he said. 'You mustn't get what I have.'

I went up to him and found him in exactly the position I had left him, white faced, but with the tops of his cheeks flushed by the fever, staring still, as he had stared, at the foot of the bed.

I took his temperature.

'What is it?'

'Something like a hundred,' I said. It was one hundred and two and four tenth.

'It was a hundred and two,' he said.

'Who said so?'

'The doctor.'

'Your temperature is all right,' I said. It's nothing to worry about.'

'I don't worry,' he said, 'but I can't keep from thinking.'

'Don't think,' I said. 'Just take it easy.'

Take it easy: Relax and not do very much

'I'm taking it easy,' he said and looked straight ahead. He was evidently holding tight onto himself about something.

'Take this with water.'

p. 166

'Do you think it will do any good?'

'Of course it will.'

I sat down and opened the *Pirate* book and commenced to read, but I could see he was not following, so I stopped.

'About what time do you think I'm going to die?' he asked.

'What?'

'About how long will it be before I die?'

'You aren't going to die. What's the matter with you?'

Oh, yes, I am. I heard him say a hundred and two.'

I am (going to die)

'People don't die with a fever of one hundred and two. That's a silly way to talk.'

'I know they do. At school in France the boys told me you can't live with forty-four degrees. I've got a hundred and two.'

He had been waiting to die all day, ever since nine o'clock in the morning.

'You poor Schatz,' I said. 'Poor old Schatz. It's like miles and kilometers. You aren't going to die. That's a different thermometer. On that thermometer thirty-seven is normal. On this kind it's ninety-eight.'

"You poor Schatz":
「かわいそうな息子よ」
old:
親しみを込めた呼びかけに使われる

'Are you sure?'

'Absolutely,' I said. 'It's like miles and kilometers. You know, like how many kilometers we make when we do seventy in the car?'

'Oh,' he said.

But his gaze at the foot of his bed relaxed slowly. The hold over himself relaxed too, finally, and the next day it was very slack and he cried very easily at little things that were of no importance.

The hold over himself:
c.f. p. 165, *l.* 31 holding tight onto himself

ABSTRACT

Questions for Literary Texts as English Teaching Materials: In the Case of Hemingway's "A Day's Wait"

Akira ONO
The Graduate School of Education, Hiroshima University
Kana TAKEHISA
The Graduate School of Education, Hiroshima University
Tomohide ISHIHARA
Aichi University

In *The Course of Study for Upper Secondary School* to be implemented in 2013 the overall objective of learning foreign languages is: "To develop students' communication abilities such as accurately understanding and appropriately conveying information, ideas, etc., deepening their understanding of language and culture, and fostering a positive attitude toward communication through foreign languages." We claim that literature can contribute to developing all the abilities articulated here. This paper, however, pays particular attention to the last ability, maintaining that students can foster "a positive attitude" toward reading through literature written in English.

To put Roland Barthes' theory simply, a "text" which is open to interpretation gives us "pleasure" of reading. Few people would object that literature is more open to interpretation than any other writing. It follows, therefore, that students, through literature, might find pleasure in reading and foster "a positive attitude" toward it.

Many studies emphasize the importance of questions in the instruction of reading. As Fukazawa (2008) and Takehisa & Ono (2010) point out, however, most of the questions in the textbooks authorized by The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology can be categorized as "questions requiring literal comprehension of the texts." According to Tsuido (1989), this type of question does not really enhance learners' reading abilities because it only makes them "look for" answers in the text. To make reading more stimulating and beneficial to learners, we maintain that not only literal but also inferential or interpretational questions are needed. And this is particularly true for literary texts, which require us to read between the lines and are open to a variety of interpretations.

Hemingway's short story, "A Day's Wait" is included in a textbook for senior high school students published in 2007. The story is put in the original, not being simplified or abridged. The problem is that the text does not have any questions, exercises or tasks that would help students comprehend the story. All it has is a very short introduction to the story and some notes on words or phrases assumed to be difficult for high school students. So, in this paper, we have developed 18 questions which we hope would lead to students' comprehension and

appreciation of the story. The questions can be divided into three types, namely (1) Type A: Literal Questions, (2) Type B: Inferential Questions and (3) Type C: Interpretational Questions. The ratio among the three types is 11:6:7. (The total number, 24 does not correspond with the number of the questions, 18. This is because we regarded 6 questions as covering two types.)